

# マチとカワの隙間

- 街に変化をもたらす新しい建築形態の提案 -

1100387 川島 卓

高知工科大学 工学部 社会システム工学科

## 1. 設計主旨

マチは様々な人を受け入れ、様々な要素が混じり合い、そのカオス的な部分が魅力のひとつであり、私たちはそんな様々な要素が潜むマチに魅了されてきた。

今回、私はマチの中の混在した要素に潜む魅力を引き出し、そこでの小さな行為や大きな行為の作り出す空気が街に溢れ出しそれぞれの要素と接していくことで新たな変化をもたらしていくと考え、境界を超える環境としての建築を提案する。

## 2. 敷地の選定と現況

### 2-1. 敷地の選定

今回の設計に当たり、高知市中心部を対象とする。

高知市中心部は主に商業地域、第一種住居地域、都市計画公園などに分かれている。にもかかわらず、街を歩いてみると、必ずしも用途地域が理想とする地域になっていないと感じる事が多くある。整然とした用途地域に属さない雑多なゾーンのことを指す。

今回私は街を現実を元に改めてゾーン別けを行う。



図 1. 高知市街区ゾーン図

上図の中央に位置するグレーゾーンに注目する。

このゾーンはマチの様々なゾーンの隙間に位置しており、住居や商業施設 公園や オフィスなどさまざまな要素が混じりあう。このゾーンを敷地として計画する。

### 2-2. 敷地の現況



写真 1 敷地現況写真 1

敷地中央を流れる江の口川は都市の高密度化に伴い、排水路として造成・高効率機能化された。結果、かつての河川の持っていた風や水を生かした快適性をもたらす空間としての魅力は著しく失われ、護岸はコンクリートの塊となり、無表情な冷たい空間となっている。また近年、郊外にマンションや大型店舗の相次ぐオープンと経済不況などの影響から、中心商店街の大型商業施設の小売店の撤退や空き地・空き家の増大が顕著となり、衰退に拍車を掛けている。

## 3. コンセプト



写真 2 敷地現況写真 2

私は敷地に建っている川と街の隙間の建物と建物のわずかな隙間に注目した。そして、そこから見えるシーンは、まるで奥に別の世界が広がっているように感じることができる。

そこで私は、狭くて圧迫感のある空間だからこそ感じる光の変化や川の流れる音や、風の微細な変化に興味を空間要素として組み込ませることにした。

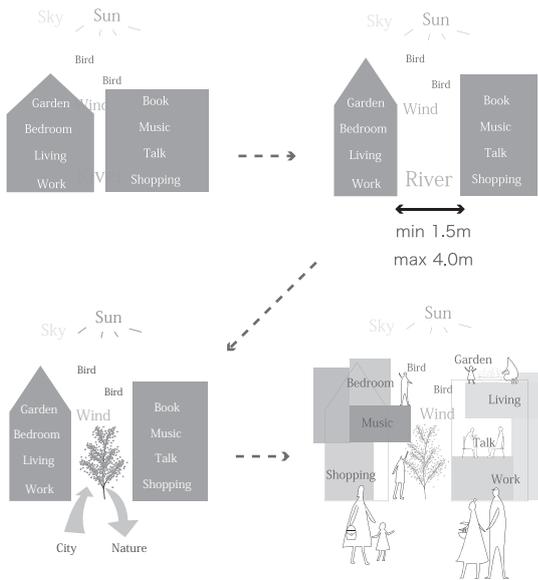


図 2. コンセプトダイアグラム

現状ではこの空間は個別に存在しており、住居 公園 商業施設 オフィスといった様々な要素の混在が活かされていない為、それぞれの建物は個別の存在であり、隙間はただの境界でしかない。

そこで次のような操作を行う。

建物と建物の隙間を約 1.5~4m 広げて人も入ることができるようにする。次に、隙間を既存のマチとカワと繋げる。そして、それぞれの建物に潜んでいる生活スタイルやシーンを取り出す。潜んでいた生活スタイルやシーンを隙間を介して繋げ、それぞれを共有しながら、ソトとの繋がりのもつ広い空間に住むことが可能となる。

#### 4. 全体計画

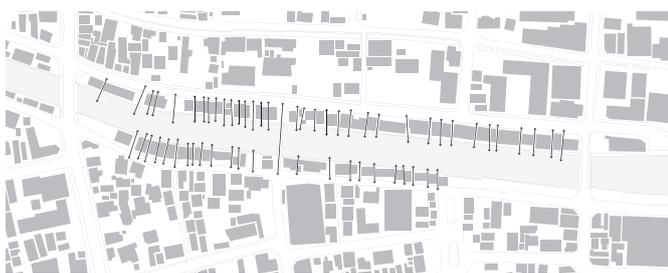
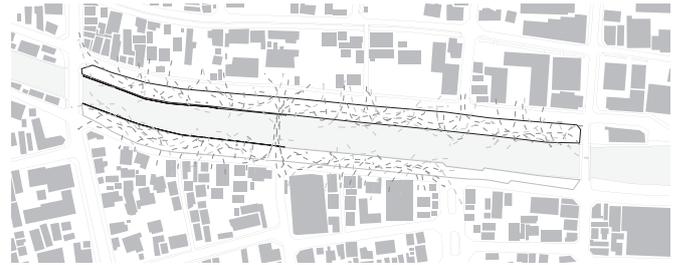


図 3. 敷地現況地図

現在の建物はカワに向かって長屋状造られており、建物と建物の隙間はカワに向かっての縦方向だけで、単一のシーンしか現れない。加えて、周辺のマチとの隙間の接点がなくマチとカワの繋がりも希薄である。



--- Nature line  
- - - Human line

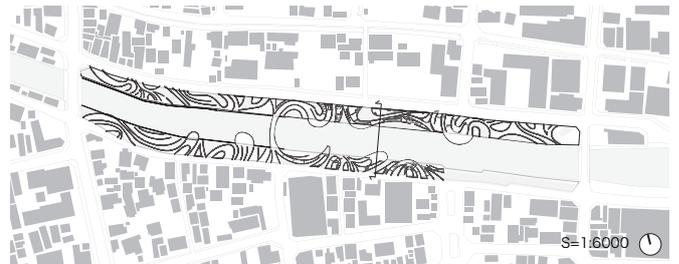


図 3. 全体計画地図

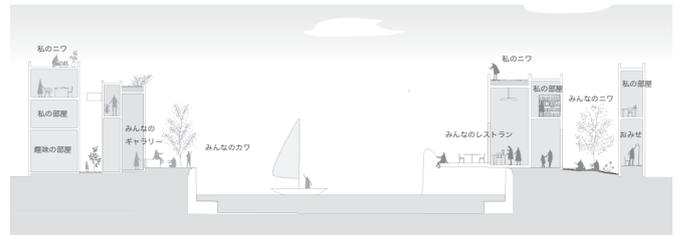


図 4. 南北断面図



写真 3. 全体パース

今回、建物の形状を決めるに当たり、自然とマチと人の動線を軸に形を形成し、建物ボリュームを再構築する。迷路みたいな隙間の空間からは、光の変化や川の流れる音や、風の微細な変化を楽しむことができる。

「建築」と言う要素が弱いため、それは自然と溶け合い風景の中へ落ち着いていく。生活空間も同様に隙間の中から溢れだし、隙間から層へと広がって他の住人の生活と重なる。そして、既存の街並みと反応し、小さな変化を起こさせる。